２０２０／０９／０６　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　副牧師

主　　題：勝利される主
聖書箇所：詩篇　２篇

テーマ　：　幸いな人が拠り所にできる主とはどのようなお方なのでしょう？

今朝のテキストは詩篇２篇です。まず、みことばを読みます。

2:1 なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。
2:2 地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、【主】と、主に油をそそがれた者とに逆らう。
2:3 「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」
2:4 天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざけられる。
2:5 ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。
2:6 「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」
2:7 「わたしは【主】の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。
2:8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。
2:9 あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」
2:10 それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。
2:11 恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ喜べ。
2:12 御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。

先週は詩篇１篇から「本当の幸せとは何か？」「本当の幸せを持っている幸いな人の特徴とはどのようなものか？」、そのことを学びました。最高の喜び、心からの満足をもっている人はこんな生き方ができる、こんな生き方をするのだということを見たのです。幸いな人の四つの特徴が記されていました。まず、幸いな人は「罪に溢れたこの世の影響から離れる人」でした。これは罪を全く犯さないということではなく、この世のアドバイスを頼りにせず、神に信頼し神を悲しませる罪から離れてそれに陥らないように自分自身を守っていくことです。また、幸いな人は「みことばを喜びとする」、みことばに喜びを見出し、いつもその真理に心を満たしている人でもありました。また、幸いな人はみことばに根差しているゆえに「神の前に価値のある実を結ぶ」という特徴をも持っていました。クリスチャンとして歩んでいくときに、私たちは例外なく困難や試練を経験します。でも、その中にあってどんなに苦しくても時が来ると必ず実が成り、その葉は枯れないのです。みこころに適う人が行うことはすべて栄えると、そのようなすばらしい祝福が幸いな人には神から約束されていました。そして最後に、幸いな人は「どんなときも神に守られている」と、そのように見たのです。

こうして著者は詩篇１篇を通して、この世が考えること、何か自分の好きなものを手に入れることができたらとか、自分が望んでいる状況を手にすることができたらとか、そんな感情や状況に支配される、左右されるような幸せではなく、神と神のみことばに根差した真の満足を持って歩むことを教えたのです。そのような幸いな者として私たちは歩んでいますか？私たちは歩むことが出来るのですよと、そのように教えてくれていたのです。

さて、今朝見ていくのはこの１篇の続きである２篇です。今、私は敢えて「続き」と言いました。それは、私たちが手にしている聖書では１篇と２篇が別々に記されていますが、かつてのクリスチャンの聖書、また、ユダヤ人の慣習では、これらの二つは一つの詩篇として考えられていたからです。そして、その証拠に、この後見ていきますが、二つには共通した考え、教え、また、共通して用いられていることばがいくつかあることに気付きます。この二つは一つのものとして、後に続く１４８の詩篇のイントロとしてあるのです。また、気付かれたかもしれませんが、１篇は「幸いなことよ」ということばで始まり、２篇は「幸いなことよ」で終わっています。ですから、この両方の詩篇において同じテーマが語られているのです。「幸いな人」、心からの満足を神のうちに見出す人の生き方がどのようなものなのか、どんな姿なのか、そのことを教えているのです。

では、なぜ、著者は１篇だけで終わりにしないで、二つに亘って「幸いな人」の姿を描いたのでしょう？それは幸いな人というのは今の人生をどのように生きていくのか、その知恵だけでなく、だれに信頼をおいて歩んでいくのか、その対象を知ることが根源にあるからです。それこそが根底にあるのです。１篇で学んだように、確かに、私たちが幸いな人として生きていくためには、罪から離れ、みことばに

喜びを見出す者でなければなりません。そんな知恵が私たちには必要なのです。しかし、それだけではない、私たちが幸いな者として歩んでいくなら、知恵とともに、私たちがいったいどんな人物に、どんなときも身を委ねることができるのか？だれに幸いを見出すことができるのか？その内容を知ることがカギになると教えるのです。幸いな人として生きていくことを私たちが本当の意味で理解するなら、この１篇２篇を通して私たちは詩篇を読まなければいけないのです。

この詩篇２篇は幸いな人はだれを頼りに生きていくべきなのか、幸いな人が拠り所にできるのはどんな存在なのか、そのことを教えています。そして、もっと具体的に言うなら、この２篇はメシヤの詩篇と呼ばれるものです。ゆえに、ここには私たちの救い主であるイエス・キリストがどんなお方なのか、そして、どんなことを成し遂げられるのかということをはっきりと教えているのです。ですから、皆さん、これからみことばを見ていくに当たって、もしかすると、今この中に酷い悲しみを覚えている方がおられるかもしれません。大変な試練を経験して喜びを失っている方がおられるかもしれません。いろいろなことが周りに起きていて先が見えず暗闇の中でもがいている方がおられるかもしれません。恐れや不安に駆られて満足を失っている方がおられるかもしれません。先週見たように、私たちは幸いな人として歩まなければならないから、そのように歩もうとしているときに、罪との戦いに疲れていたり苦しんでいる方がおられるかもしれません。また、今も心の中に何かの渇きがあって、それを満たすためにどうにかして自分自身の幸せを見出そうと追い求めている方がおられるかもしれません。

どうぞ、皆さん、今日のみことばに耳を傾けてください。聖書は幸いな人として主にすべてを委ねて歩むことがいかにすばらしいことなのか、幸いな人として主に信頼することがいかに最高の喜びをもたらすのか、そのことを教えているからです。ぜひ心を砕いて、この真理が皆さんの励ましと喜びとなることを心から祈っています。

実際に、主がどのようなお方なのか？幸いな人が拠り頼むことができる主がいったい何を為さるのか？今回はそのことを四つの場面から見ていきたいと思います。ここには四つの場面が出て来るのです。その一つひとつをともに見ていきましょう。

☆四つの場面

１．主に対する人々の愚かな反抗　　１－３節

１－３節に見る一つ目の場面、ここで目撃するのは「主に対する人々の愚かな反抗」です。主に対して反抗している人々の愚かな姿を見ることができます。１、２節に出て来る人物に注目してください。ここに**「国々、国民、地の王たち、治める者たち」**と、すべて複数の人物を表すことばが使われています。これは、先週見た１篇では個々人の生き方、個々人の姿を語っていました。しかし、２篇では複数の集まりについて記しています。これはどういうことか？それは主に反抗する者たちが個人単位で行動しているのではなく、国や政府、権力者たち、国籍や人種に関係なく、あらゆる人々が集まって行っているものだということです。多くの人が一つとなって、主と主に油を注がれた者に向かって反抗するというのです。この地上におけるあらゆる人々、あらゆる権力、あらゆる国家、それらが神に逆らうのだと…。

では、彼らはどのように逆らうのでしょう？次に記されている動詞がそれを示しています。**「騒ぎ立ち、…むなしくつぶやく」、「立ち構え、…相ともに集まり、」**と、このような姿が描かれています。「騒ぎ立ち」とは「激怒、憤怒」とも訳せることばですが、人々が怒り狂って興奮して陰謀を企てるために集まっている、そのような様子を現しています。次に**「むなしくつぶやく」**ということばがありますが、これは前回見た１篇の２節の中にあった**「ロずさむ」**ということばと同じことばです。要するに、幸いな人とはいつも神の思い、神の考え、みことばで心を思い巡らせる人でした。しかし、神に逆らう人の心は自分たちの考え、神に反抗する策略、陰謀で心を巡らせているのです。

皆さん、想像してみてください。この地上の国家、様々な人々、その人たちが怒りに溢れて神に逆らうために集まっているのです。そして、自分たちの知恵を出し合って、持てるすべての能力を用いていろんな作戦を立てて、今にも、主と主に油を注がれた者に戦いを挑もうとしている姿です。ここで「主」と「主に油を注がれた」という人物が記されていますが、これはいったいだれのことを指しているのでしょう？もう皆さんは「油注がれた者」がヘブル語では「メシヤ」、ギリシャ語では「キリスト」と訳せることばだと知っておられるでしょう。この「油注がれた者」とは旧約の時代、古代イスラエルにおいてこの行為は、祭司や預言者、王を神の働きのために特別に選び聖める目的で行っていた行為です。神の働きのために召したのです。ですから、この２：２でこのことばを見るときに、著者の頭の中にはイスラエルの王、ダビデの王座に就く王たちのことを指してこう言ったのかもしれません。「主」と「主に油を注がれた」王たちに逆らうのだと言います。

新約聖書を知っている私たちにとってはこの「油注がれた者」こそがダビデの子孫として生まれたメシヤ、救い主イエス・キリストであることを知っているでしょう。ペテロは使徒の働き４：２５－２７でこのように述べています。**「:25 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの**

口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。:26 地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』:27 事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油をそそがれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、」と。この世界の人々、この世界の国家、そのような複数の者たちはヤハウェ、全知全能の神と主に油を注がれたイエス・キリストに反抗するのだ、イエス・キリストに戦いを挑むのだと見ることができます。

では､いったい彼らはなぜ油注がれた者に逆らうでしょう？その理由は３節に記されています｡**「さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」**と。彼らが神に逆らうのは、神に支配されること、神の権威が自分たちを締め付けることを喜びとしないからです。彼らにとって神に支配されることは、まるで鎖に繋がれているかのように、自由を失ったかのように感じるのです。そして、そこから自由になりたい、神の支配から逃れたいと望むゆえに、**「かせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう。」**と願ってそのように行動するのです。彼らはこう思っています。「神に従うこと、それは重荷でしかありません。自分たちの好きにさせてください。だれかに自分の人生を決めてほしくありません。まして、神になど支配されたくありません。自分がすることは自分で決めます。自分の思うままに自由に生きることこそが幸せに生きるために必要なのです。」と。

どうでしょう、皆さん。このような考え方はこのみことばだけでなく、私たちの周りに溢れていることに気付かれるでしょう。自分の好きなように生きさせてくれと、自分が欲するものを得て、そのために生きていきたいと。そして、それを奪うものがあれば容赦なく逆らうのです。たとえば、子どもが親に逆らうこと、生徒が先生に逆らうこと、自分の自由を奪われることにおいて、もしかすると、それは夫婦間でも職場であっても、また、この社会を見渡しても、このことについては絶対に反抗するのです。自分から自由を奪い取らせないとします。そのように怒り狂って争っている人の姿を私たちは見ます。

また、私たちは自分自身の心に従うことに喜びを見出すという考え方も目の当たりにするでしょう。自分の心に従えば幸せを手に入れると。だから、私たちは大なり小なり、自分の人生は自分の願うこと、自分の望むことを自由にできるなら幸せになれると、そのように考えていたりします。ここにおられるひとり一人の皆さん、そのような思いを持っていたこと、また、今も持っているかもしれません。でも、このような考えが私たちの周りに蔓延していることに私たちは驚きません。なぜなら、まさにこの思いこそあのエデンの園から始まった罪の性質として私たちのうちに残っているものだからです。

思い出してください。創世記の初めです。アダムとエバが神によってエデンの園に置かれ、彼らにはすべて必要なものが与えられていました。彼らはいつも満足を持っていて、神との親密な関係を持っていました。彼らは私たち人間のだれもが経験したことがないような幸せを持って歩んでいたのです。でも、よく知っている通り、彼らには自由が与えられていたけれど、一つだけ神のルールがありました。園のどの木から取って食べてもいいけれど、善悪の知識の木からは取って食べてはならないと。

たった一つの命令に従うだけでよかったのです。しかし、彼らはその命令に逆らったのです。どうして？彼らは幸せに満たされていたはずです。でも、彼らは神の命令に従うことよりも、自分自身が神のようになることを望んだのです。そして、その結果、彼らは幸せになってでしょうか？本当の満足を持ってそれからを歩むことができたでしょうか？彼らは幸せを手に入れられなかっただけでなく、持っていたすべての幸せを失ったのです。神によって最高の満足を持っていたのです。しかし、神よりも自分の心の願い自分の考えに従うことを望んだのです。そこには幸せなどなかったのです。

ですから、私たちが神以外のものに目を向け、そこに幸せを求めているなら、自分の心の願いに熱心になることで､自分の考えに従うことによって幸せを得ると考えているなら､ここに答えがあるのです。そこには幸いなどないと。自分勝手に生きる生き方には幸せがないと、そのように詩篇が教えるのですが、それだけではありません。この後、こんな行いに対しては厳しい結果が伴うということが二つ目の場面に見ることが出来ます。

２．主の怒りの応答　　４－６節

二つ目の場面は４－６節ですが、ここでは「主の怒りの応答」を見ます。神に逆らい自分たちの勝手に生きる者に対して、主は怒りを持って応答されるのです。４節に**「天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざけられる。」**とあります。先程の場面をイメージして思い出してください。この世界の国家やすべての人々が神に対して戦いを挑もうと策略を練っているのです。それに対して神は動揺したりあたふたすることは決してありません。また、そのような人たちに対して「まぁまぁ…」と彼らが納得する説明をしてなだめようともされません。主は全世界のものが自分に逆らっているその姿を見ても恐れを抱くこともありません。では、どのように応答されるのか？「主は天の御座に座ったまま、その人たちを見下ろして笑われる」と言うのです。これは何か面白いことを見つけて笑っているというのではありません。彼らのやっていることが明らかに余りにも愚かで滑稽だから、それを見て神はあざけられ

るのです。
　同じようなことが詩篇３７：１２－１３に記されています。**「:12 悪者は正しい者に敵対して事を図り、歯ぎしりして彼に向かう。:13 主は彼を笑われる。彼の日が迫っているのをご覧になるから。」**と。神は悪者の図り事を笑われる、失笑されると言うのです。それが余りにも愚かだからです。また、主はただそれを笑われるだけではありません。その後に書かれているように、５節**「ここに主は、怒りをもって彼らに告げ、燃える怒りで彼らを恐れおののかせる。」**のです。この世界を造った神はことばでもってこの世界のすべてのものを造られました。そんな創造主が語られるとき、神に逆らうすべてのものは**「恐れおのの」**く、彼らはその力強さの前に恐怖で怯えるということです。
　私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちの神は単に愛のお方であるだけではない、罪に対しては怒りを燃やす正しい義なる神だということです。神は必ず罪をそのままにはしておかれません。必ず、正しい審判を下されます。詩篇７：１１に**「神は正しい審判者、日々、怒る神。」**とある通りです。皆さん、このような神の前に逆らって策略を立てて、もっと言えば、自分が思う自由を、自分自身の心の願いに心の考えに従って見出そうとしているのであれば、幸せを主以外のどこか別のところに見出そうとしているなら、その行為は神の前に愚かだということです。
　ある人はこう言うかもしれません。「愚かだなんて言い過ぎですよ。この世ではそれが普通でしょ。自分の心の声に従って自分の自由を求めて生きていくことはごく普通のことでしょう…」と。なぜ、その行為が愚かなのか、どうして神に逆らい自分の心に従って自由を求めることが愚かなのでしょう？

☆なぜ、主に逆らうことが愚かなことなのか？その二つの理由

１）私たちが頼りにする心は信頼できるものではないから

　人が頼りにしているその心は信頼できるものではないということです。そうですね、先にも見たように、私たちは自分の心や自分のうちにある思いに従うことに対して何の問題も持っていません。このことこそやるべきこと、自分の幸せを見出すものだと思うからです。しかし、みことばを見る時に、みことばは私たちの心についてこのように述べています。エレミヤ１７：９**「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」**、また、箴言２１：２**「人は自分の道はみな正しいと思う。しかし【主】は人の心の値うちをはかられる。」**、聖書が明白に教えることは、私たちの心は陰険で騙されやすく不誠実なものだということです。私たちのこの世の考え方は自分の心に従うことが正しいのです。しかし、聖書が教えることは、自分の心に従うことは自分自身を騙し騙されて頼りないものに従うことだということです。私たちも自分自身の歩みを見るなら、自分の考えることが正しい、自分の考える道こそが正しいのだと、そのように訴えかけて来ることを経験することもあるでしょう。
　それだけでなく、私たちの心はいつも自分が一番であるように、自分のやりたいことをやろう、いつも「自分、自分と」と考えさせるのです。その証拠に、たとえば、私たちはだれかに自分の間違いを指摘された時、自分が正しいと思ってやっていることに対して「それは間違っていますよ！」と指摘された時、その人に対して怒りを持って自分自身を正当化することもあります。何か不満を抱くようなことがある時には、自分自身を見るのではなく、自分以外の何かに「私はこんな不満を持っている。それは環境が悪いから、あの人がそうするから…」と、そのようにして私たちは自分の心を守ろうとするわけです。私たちの心はプライドに溢れ、自分の生き方こそ正しい、自分の知恵こそ信頼に値するものだと思い込ませるのです。だから、もし私たちがそんな心に委ねて自分の人生の羅針盤として頼りにして歩んでいくなら、必ず、その道は迷うと言います。私たちの心はそんなに信頼できるものではないのです。
　しかし、主の考え、主の知恵は私たちよりも遥かに優っていることをみことばに見ることができます。イザヤ書５５：８－９**「:8 「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――【主】の御告げ――:9 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」**と。私たちの考えよりも遥かに優る神がおられるのです。私たちはそんな神の知恵に頼って生きていくことができるのです。もし、私たちが「そんなものは必要ありません。私は自分の心に頼っていきます。自分の思い考えに従って生きていきます。」と、そのように私たちが歩んでいくなら、それは愚かことだと言われるのです。自分を迷わせるようなものに頼って歩む生き方は愚かだと。

２）神がすべてのことを支配しているから

　二つ目に、神がすべてのことを支配されているから、私たちがいくら策略を立ててもそれは無駄なわけです。神がすべてのことを支配されているお方であるからこそ、人の策略は愚かだということです。４節で主は**「天の御座に着いておられる」**と言われています。言い換えるなら、主は地上をまたこの世界のすべてを支配されている王だということです。この主こそがこの世界に起こること、私たちひとり一人の生活に起こる些細なこともすべて支配しておられる、そんな主権者なのだと言います。だから、私たちがどれ程考えても、どんなに時間をかけて綿密な計画を立てて神に逆らおうとしたとしても、それは

愚かなことです。なぜなら、神の決めたことが必ず成るのであって、私たちが考えたことが成るのではないからです。主がすべてのことを計画しそのすべてが成されるのです。箴言１６：９に**「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは【主】である。」**と言っています。

皆さん、私たちはいろんなことを考え計画しますが、主の計画、主がそれを成し遂げられると言うのです。だからこそ、私たちはそんな主に頼ることができるのに、それに逆らって自分の心に従い自分の考えに従って歩むのであれば、それは愚かなことですと言われるのです。私たちの心がどれほど陰険なもので頼りにならないものであるかを知って、私たちの主が私たちの人生の中において一日一日、一分一秒のすべてのことを支配されている主権者であることを知っているなら、私たちはどんな歩みをしているでしょうか？

自分の心に従って、自分の感情に従って、何かを受けたならそれに反応してその心のままにするのか、それとも、私たちのすべてを支配されている主権者なる神に自分自身を委ねた歩みをしているでしょうか？いったい何に自分自身の行為、行動を支配させているのでしょうか？自分の感情が自分の行為を決めるのでしょうか？それとも、知恵に溢れた神のみことばによって自分の行為を決めるのでしょうか？どのようにして私たち一人ひとりは歩んでいるでしょうか？

主権者であられる主は実際にこの場面でも、この４－６節の中でも、人々の策略に対してこのように言われます。６節**「しかし、わたしは、わたしの王を立てた。わたしの聖なる山、シオンに。」**と。神は神に逆らいいろんな計画を立てる者に向かってこのように言われるのです。「確かに、あなたがたはいろんな計画を立てているかもしれない。わたしの計画に反抗しようとしているかもしれない。しかし、私はもう自分が決めたように成し遂げた。計画した通り、自分の王をシオンの上に立てた。」と。　神はご自身の手でこの世界のすべてを支配する王を選ばれた。そして、この王こそ、神の子イエス・キリストなのです。このイエス・キリストを通してどのようなことが成し遂げられるのか？

３．主の偉大な御計画　　７－９節

その主の偉大な計画が三つ目の場面として７－９節に記されています。それは「主の偉大な計画」です。**「:7「わたしは【主】の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。:8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。:9 あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」**、ここに**『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。』**と書かれています。この**「わたしの子」**ということばは聖書のいろいろな箇所に出て来ますが、これはいったいだれを指しているのでしょう？たとえば、Ⅱサムエル７：１４には**「わたしは彼にとって父となり、彼はわたしにとって子となる。もし彼が罪を犯すときは、わたしは人の杖、人の子のむちをもって彼を懲らしめる。」**とあります。この箇所には神がダビデ王と交わされた契約を見ることができます。神はダビデに対し、また、ダビデに継ぐ王たちに対して、あなたがたは「神の子」と呼ばれる、「神の子」と扱われるという約束を与えておられます。

だからこそ、この詩篇２：７で**「わたしの子」**ということばを見た時に、神がダビデに向かって「ダビデ、あなたはわたしの子だ。あなたはわたしが選んだ王なのだ。」とダビデに当てはめて読むこともできます。しかし、初めに見たように、新約聖書を知っている私たちはこの「わたしの子」がダビデの契約を本当の意味で成就した神の子、イエス・キリストであることが分かります。

使徒の働き１３：３３－３４では**「:33 神は、イエスをよみがえらせ、それによって、私たち子孫にその約束を果たされました。詩篇の第二篇に、『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ』と書いてあるとおりです。:34 神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちることのない方とされたことについては、『わたしはダビデに約束した聖なる確かな祝福を、あなたがたに与える』というように言われていました。」**と、ここでパウロが詩篇の箇所を引用して、キリストが死に勝利された復活されたお方であることを証したのです。また、ヘブル書１：４－５にも**「:4 御子は、御使いたちよりもさらにすぐれた御名を相続されたように、それだけ御使いよりもまさるものとなられました。:5 神は、かつてどの御使いに向かって、こう言われたでしょう。「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」またさらに、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」**と書かれています。ここではこの詩篇２：７を引用して、キリストこそが御使いよりも遥かに優れた栄光に満ちた神であることを教えているのです。

ですから、私たちが新約を見る時に、この主イエス･キリストこそがすべてを統治される神が選んだ王だと知ることになるのです。そして大切なことはこの王を主が定められておられたということです。**「【主】の定めについて語ろう。」**とあります。１．のところで使徒４：２５－２７を見ましたが、もう一度見てください。２５－２８節です。**「:25 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。:26 地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』:27 事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油をそそがれた、あなたの聖なるしもべイエス**

に逆らってこの都に集まり、:28 あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行いました。」、２８節を見てください。

ここに書かれています。この世の人々、国家は油注がれた者イエスに対して逆らったと。具体的に言えば、ヘロデやピラト、ローマ帝国やユダヤ人たちは、神が油注がれたイエスに反抗し罵倒しました。彼らはイエスが神であることをただ認めなかっただけではなく、彼を憎み、怒りを示し、そして最後に、彼を十字架につけたわけです。歴史上、最も残酷で苦しいとされている十字架の上で、神の小羊であったイエスは死んだのです。しかし、驚くべきことは、みことばにあるようにこの出来事すら主の**「御手とみこころによって、あらかじめお定めになったこと」**だったということです。彼らは思ったことでしょう。「自分たちが必死に練った策略が上手くいった。邪魔者がやっと消え失せた。」と。聖書が教えることは、彼らもまた主のご計画を成し遂げるための一つのコマに過ぎなかったということです。このすべてのことが十字架も含めて、この世界の主権者でありすべてを統治されているお方のご計画だったのです。

皆さん、主イエス・キリストこそが主が定め、主が選ばれたこの世界を治める王です。そして、このお方こそがすべての国々を、地の果て果てまでを所有される権威を持ったお方です。そして、このすべてを支配されている王が為されることが９節にこのように書かれています。**「鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。」**と。この王は何をするのか？すべてを支配される主はご自分に反抗する者たちを滅ぼされるということです。器が粉々になるように、その者たちを必ず滅ぼす、そんな日がやって来るのだと言います。そのことがここに約束されているのです。私たちの主が悪に対して完全に勝利される、そんな日が必ずやって来るのです。

パウロはピリピ書の中でその光景をこのように描いています。ピリピ２：１０－１１**「:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」**と。すべての者が主の前にひざまずいて「あなたこそ主です」とそのように口にする日が必ずやって来ると言うのです。このことは今の私たちにとって最大の希望ではないでしょうか？

今、どんなことが起こっていたとしても、どんな苦しみや試練を経験していたとしても、先が見えないゆえに自分に起こっていることが理解できないとしても、神はそれらをすべて支配されている、そして、その結果、最後には神が必ず勝利されるのです。あの十字架さえも定めておられ、すべてのことを定めておられるその神が、必ず悪をさばき、そして、そのすべてを統治する日が必ずやって来ると言うのです。私たちはその希望を今もって生きことができるのです。どれ程私たちが理解できないことがあったとしても、私たちは終わりをよく知っています。必ず、主が勝利者となられるということです。

４．主のあわれみ深い招き　　１０－１２節

そして、最後に四つ目の場面が１０－１２節に出て来ます。**「:10 それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。:11 恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ喜べ。:12 御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。」**と。ここに私たちは「主のあわれみ深い招き」を見ることが出来ます。その「招き」についてここに大きく三つのことが記されています。

〇三つの招き

ａ）賢い選択をすること

主は賢い選択をするようにと招いておられるのです。１０節**「それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。」**、**「悟れ」**ということばは「賢くありなさい、慎重に行動しなさい」ということです。**「慎め」**とは「教えを受け入れなさい」ということです。主は戦いを挑もう逆らおうと戦略を必死に練っている者たちに対して、このように命令したのです。「あなたがたは今怒り狂ってわたしに戦いを挑もうとしている。けれども落ち着いて考えなさい。冷静に考えるならあなたがたには一切の勝利がないことがわかるはずでしょう。そんな戦いは止めなさい。」とそのように言われるのです。

イエスもこのようなたとえを話されています。ルカ１４：３１－３２**「:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。:32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めるでしょう。」**と。戦局を正しく見ることのできる王、自分の力量を正しく測れる賢い王は負けると分かっている戦いはしない、戦いに出る前に和解を求めると言うのです。

今日、この中にも主の前にへりくだって和解を申し出なければならない人がおられるのではないかと思います。もし、私たちが主に逆らって自分の心の思いに従って、自分の願いを叶えるために、自分の幸いを探すために自分勝手に生きているなら、そんな私たちを見て主は「笑って」おられると言います。そして、そんな生き方をしている者に対して主は必ず激しい怒りの炎によって滅ぼされるのです。著者はそのことをはっきりと示しています。

イエス・キリストは一度目は約束されていた救い主として、私たちの罪の罰を代わりに受けるためにこの世に来られました。Ｉペテロ２：２２－２４には**「:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」**とあります。罪のない主が、人々に罵られても苦しめられても、それを耐え忍び、私たちこそがその罰を受けるのに値したのに、私たちに代わって罪を赦すためにその血を流してくださったと。その大きな主の犠牲の上に私たちはいやされたのです。私たちは罪赦されただけではありません。私たちはこの救いにあって本当の満足を、神を知り、そして、みことばに立って歩むその満足を持つことができる者に変えられたのです。

しかし、二度目に彼が帰って来られるときは救い主としてではなく、王として、この世界すべてを支配する勝利者として帰って来られます。そして、ご自分に逆らう者すべてに対して、その間違いすべてを正しくさばかれるのです。その時にはだれ一人として、このさばきに抗うことはできないのです。ですから皆さん、自分自身のこととして、私たちには二つの選択が与えられているのです。一つは、この王であるイエスの前に降伏して、自分の今までの生き方を悔い改めて、そして、主のために主にすべてをささげて生きていく、そのような生き方か？それとも、自分自身の思いに従って主に逆らい続けていく生き方か？このどちらかです。最後は、重大な結果をもたらすということを私たちは賢く慎重に考えなければいけないと、そのことを主が教えているのです。

ｂ）恐れと喜びをもって主に仕えること

１１節**「恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ喜べ。」**と、二つ目の招きは「恐れと喜びをもって主に仕えること」です。かつて、私たちは自分のために生きていました。しかし、主が私たちを救ってくださったゆえに義のために生きる者へと変わった私たちは、主のことを考えその主に仕えるのです。そして、その態度はまず「恐れをもって主に仕える」ことです。「恐れ」とは恐怖をもって仕えることではありません。私たちは神に罪を赦されたゆえに、私たちはもう罪の罰を恐れることはないのです。「恐れをもって仕える」ということは、神に対して畏敬の念をもって仕えるということです。神が罪を憎まれる聖い方であることを覚えて、その罪から離れて、神の前に正しくあろうとして仕えていくのです。

私たちは益々神を愛するゆえに神が憎まれる罪から離れようとします。まさに「幸いな人」の初めに見た生き方を求められているのです。また、恐れることと同時に、喜んで仕えることも求められています。神に仕えることを自分自身の最大の喜びとして生きていきなさいと言うのです。

皆さん、どうでしょう？私たちはいつも恐れと喜びに溢れて主に仕えようとしているでしょうか？主を愛するゆえに主が憎まれる罪から離れようとしているでしょうか？それとも、かつて生きて来たように、自分自身の心に従ったり、悪の影響に溢れた様々な考えに耳を傾けて、それらを頼りにして生きているでしょうか？また、私たちは最大の喜びをもって仕えているでしょうか？いやいやではなく、しなければならないからではなく、主が私を愛してくださったから私も同じ愛をもって仕えようと、そのように歩んでいるでしょうか？

ｃ）主に完全に服従する

そして最後は「主に完全に服従する」ということです。１２節**「御子に口づけせよ。…」**とありますが、これは何かの愛情表現の一種ではありません。これはその人物が主人に対して心からの忠誠を誓うこと、へりくだって自分自身のすべてをささげて従うことを意味しているのです。私たちは皆、この主キリストに勝利者である王に口づけするように、自分自身のすべてをささげて、すべてを委ねて歩んでいきなさいと命じ、しかも、その決断を早くしなさいと言います。次にこう続いているからです。**「…主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。」**と。主が主に逆らう者の上に怒りの炎を降り注ぐ日が近いのだと言います。だからこそ「今は大丈夫！」などと考えていてはいけない。今、自分自身のすべてをささげて生きていきなさいと言うのです。この「すべて」というのは私たちの心も思いも感情も、すべてをささげて生きていくということです。主の主権にすべて自分自身をささげるのです。

主はこのようにして私たちに悔い改めを命じておられます。すべてをささげてわたしに従って生きていきなさいと。そして、そのような者に主はあわれみをもって救いを備えてくださるのです。そのような者たちを主は今は忍耐を持って待っておられます。しかし、必ず勝利者としてすべてをさばくその日が来る、だから、今、主に服従して歩みなさいと言われるのです。Ⅱペテロ３：９に**「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」**とある通りです。

主はすべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。すべての人が自分の罪を悔い改めて主の救いに与ることを望んでおられます。まだ、この救いを知らない人を忍耐を持って待ってくださっているのです。しかし、その忍耐もいつまでも続くものではありません。だからこそ今、主に完全に服従することです。

まとめ　：　最後に著者はこう言いました。**「幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。」**と。なぜ、主に身を避けることが幸いなことなのか？なぜ、それがその人に最高の喜びをもたらすのか？そのことは今見て来た通り、この主こそが知恵にあふれた主権者だからです。この世界のすべてを支配されている王です。私たちがこの方に信頼するのであれば、この方に従っていくのであれば、そこに本当の幸いがあるということです。私たちがこの主のうちに身を委ね、この主の知恵を求めていつも生きていく、この主が必ず成されるその約束に希望を置いて歩むなら、私たちは最高の喜びをもって今を生きていくことが出来るとそのように教えているのです。

「幸いな人」、それはこれまで見て来たように、その人は罪を離れ神のことばを喜びとする人でした。そんな知恵を持って歩んでいくのです。そして同時に、だれに仕えていくのか、主、主権者であられ、王の王である勝利者にいつも目を留めて歩んでいきます。この二つを持って「幸いな人」は歩んでいくのです。私たちひとり一人に問いかけなければいけないことは、あなた自身が「幸いな人」として歩んでいるかということです。

最後に、メッセージの冒頭でこの詩篇１篇、２篇は後に続く１４８篇のイントロだと話しました。そして、今私たちはイントロの部分を見ました。次にすることはもちろん中身を見ていくことです。ですから、私がこのようにしてみことばを語る機会があるなら、その機会ごとにこれから詩篇を見ていきたいと思います。このペースで１４８篇を見ていくなら、少なくとも１０年はかかるでしょう。皆さんはまだまだお若いです。このようにして詩篇を見ていく時に、すばらしい真理がいろんな所に示されています。私たちがどんな知恵を持って歩むのか、どんな方を見て歩むのか、そのように「幸いな者」として、今日だけでなく一日一日をともに歩んで行きましょう！！